odai

magazine

vol.6

■えいがのこと『UFO 少年アブドラジャン』

月に一度くらいは映画館に行きたいものだけども、今月は金銭的な理由によって自宅謹慎でDVD鑑賞。当時、とは言っても2001年の話だけど、昔アニメイトの上にあったユーロスペースで見た映画だ。なんとも懐かしい。吉田戦車がコメントを寄せていたのを覚えている。あの頃は渋谷に行くと少しドキドキしていた気もする。

映画のことに触れると、これは結構古い映画なんだけど原題から察するようにスピルバーグへのオマージュ的な作品。コルホーズという農家の組合みたいのがあって、地理で受験した身としてはこうゆう単語を見かけるというのは少し嬉しかい。

バルザバイに拾われ、アブドラジャンと名付けられた少年は不思議な力で村に色々と不思議なことを巻き起こすというのが大筋。村の電気屋、ホルミルザはHiFiビデオデッキを3ドル／kgという破格で売る。「これには日本のメーカーも困りました」という一件があるのだけど、一体1台いくらなのだろう。

大学生になってKORGのElectribeとMTRを買った頃で、アブドラジャンという曲じみたものを作った。ちょうど祖父が亡くなった頃でもある。登場する村の人たちは純朴で、東京に疲れてしまったという方におすすめの一本です。

『UFO 少年アブドラジャン』
Abdulladzhan,
Ili Posvyaschayestya Stivenu Spilbergu
'92　ウズベキスタン
監督・脚本　ズリフィカール・ムサコフ

■ぶらり。

杉浦俊介

喫茶店のことを書くから喫茶瞥瞥と少々かぶってしまうけれど、気にしない。

この日は何の宛もなく北千住に行った。何の宛もないというのは嘘で、北千住の知らない顔をまた見てみようというのが少しはあったのだけど、すぐに気が変わって終わってしまった。自転車に乗っていると歩くのとは気分が違ってしまう。

それでも少しうろちょろしてから南千住の方に向かった。正確には蔵前の方に行ってみようかと思って千住大橋を渡った。ちょうど昼時、腹も少し減っていたら喫茶店を通り過ぎる。定食屋みたいなサンプルが軒先にあって、『あー、ご飯ある喫茶店だ。』と10mくらい戻って店の前に出ているメニューを見て入ることに。

まだ誰もいない。なんとなく進んだ先にあった窓際の席に行く。『一人なのに4人席座っちゃったな』と思いつつチキンカツ定食を注文。待っているとみるみるうちに常連らしきおばちゃん達が店に入ってくる。『このペースで人が入ってきたら流石に、』と思って店のママさんに「席移動した方がいいですよね？」と言うと、「大丈夫ですよ。じゃあ綺麗な方が見えたら相席にさせていただきますね。」とにっこり。

なんともいい店だった。千住大橋の袂のリオという喫茶店。千住大橋は隅田川にかかった最初の橋。この店とは関係ないけど、チキンカツはレモン絞ってケチャップで食べたい。懐かしい小台の味。結局、綺麗な人とは相席にならなかった。

■ビールとワッフルだけじゃない。

そういって、ベルギーのことたまに書くかもしれません。

かつてsoy un caballoというデュオがいました。今では別々に活動していて、その片方のthomas jean henriがcabaneというプロジェクトを始めました。彼はsoy un caballo以来、ずっと創作活動をやめてしまっていたのですが、この時がやってきました。

cabaneでは彼が作曲、high llamasのsean o'haganがアレンジ、ゲストヴォーカルにはbonnie prince billyのwill oldhamやthis is the kitのkate stableが参加しています。

thomasはとても優しいです。一昨年のヨーロッパ旅行でブリュッセルに滞在していた数日、彼の部屋に泊めて貰っていました。彼はとても忙しく、初日の夜にバーで一緒に食事をした程度で家でもそうそう会うことはありませんでした。ある朝、ブリュッセルにも少し慣れてその日はトラムで人との待ち合わせ場所に向かおうと停留所に行くとthomasが立っていました。車中、彼と少し話していると、乗ってきた老婆が切符の使い方がわからなそうにしていた。すると彼は彼女の方に行って乗車システムを丁寧に説明してあげていた。僕は彼の人間としての優しさなんかも滲み出ているような音が好きなので活動が始まったことが嬉しいです。並んだ名前を見て聴くまでもなく良く、聴いて納得です。どうせだったらsoy un caballoの未発曲も入れてよかったんじゃないかなと勝手に思ったりします。caramel beurre saleというところでVinylを注文したのに全然届きません。どうしたのでしょう。

そんなcabaneを紹介してもらえるような媒体を探しています。もしご興味ある方がいらっしゃいましたらご連絡ください。必要であればインタビューもしますのでよろしくお願い致します。

音源はここからたどって聴けます。

https://www.facebook.com/cabanemusic

■山のこと／花のいろ

長谷川至洋

好きな花を聞かれた時は、こう答えることに決めている。

「クロユリ」

クロユリは夏に高山に咲く暗赤色の花。花言葉は第一に「恋」、第二に「呪い」である。つまり、情念の花といえようか。八ヶ岳や日本アルプスなどで見ることができる。

名前のとおりに真っ黒な花ではないが、遠目に見れば、白や黄色やピンクの花々の中で、クロユリはやっぱり黒なのである。

僕がはじめてクロユリを見たのは、八ヶ岳の一番南の方にある権現岳というところだった。クロユリを見たくてそこへ行ったので、山頂付近に小さな暗い花を見つけたときには、一人で喜んだものだ。花を見て、あんなふうにうれしくなったことはあの時が初めてだったような気がする。

愛と憎しみは紙一重であって、両者が表裏一体であることは言うまでもない。仏教の考え方からすれば、どちらも心の執着から生じる煩悩であって、悟りへの妨害物であろう。

とはいえ、それを消し去ることは簡単なことではない。愛も憎しみも、結局のところ、心に深く宿った暗い影なのだろうか。7月の明るい陽射しの中で、静かに揺れていたクロユリの花を思い浮かべては、暗い情念が帯びる凄みのある美しさのようなものが、誰の心にもひっそりとあるのだろうかと考えたりする。

権現岳には、その後はまだ再訪できていない。

■「後瑠府玖裸不」

ゴ　５０すぎたマザーがペリーのためかわいい子供のペリーのため仕方なく水着を着て一緒にラグーンしてやる。

ル　バイキングといいながら姉ルーの胃袋は彼（ボーイフレンド）のすすめに耐えきれず穴をずんとあけていく。

フ　うまれかわったベジーはゴルフのボコボコのパーツになり、草の上に人の手により無理に作られた、草の上に、転がり、土に砂にまみれ最後にはポチャン。

ク　ユーフォーに乗ってた壮年の少年は、
実の父と火星を燃やしてもやしをくって地球へ帰る。

ラ　体調が悪い、とうるさい。うるさいなあと食事をのこす。ドアをバンと閉める。愛に背を向けわめき散らす。

ブ　枯れたようなプールをアピールしてくるな。寂しいお祭りのチラシを配るな。老人がバザーでまごころこめてちりめんとかの小物売るな。

５０，

by　滝沢朋恵

■それゆけ！　なんでも計算隊

わたしはジャック・マキ。なんでも計算隊の隊長だよ。趣味は計算すること。何を計算するのかって？　そうだな、なんでもだね。わたしの計算には目的がない。ただ思ったこと、目についたものを、まずは計算してみる。そこから何かが始まるかどうかは、わからない。それは例えばこんなふうなものだよ。

私の部屋から最寄り駅までは 1.5km。ということは往復すると 3km。10 往復すれば 30km。ということは 30 往復すれば 90km になるなあ。これは私の部屋から東京までの距離とだいたい同じになる。家から駅までを 30 往復すればもう東京に着くなんて、なんだか簡単に歩いていけるんだな東京まで。という気にならないかい？ こんなふうに、計算によって世界の見方を変えていくこともできるんだ。どうだい？ なかなか楽しい気持ちになってくるじゃないか。

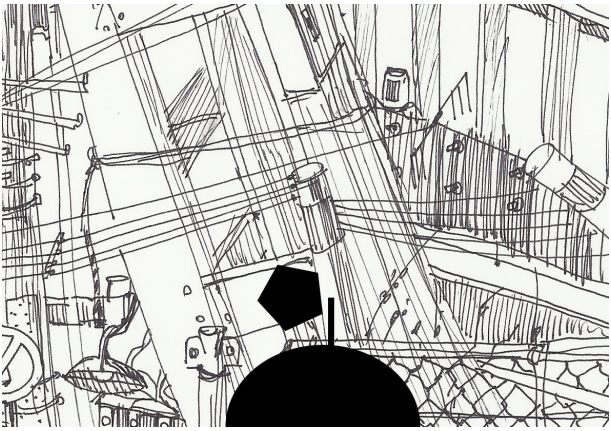
とりとめのない計算の楽しさを知りたくなったら、あなたはもう隊員だよ。

■１２８段の階段のうた

１段目

長谷川至洋

その日は夢の中でずっとリンゴを食べ続けていた。皮をむいて食べ続けていると、いつしかぼくはリンゴの皮に埋もれ、これは大変ではないか！　と思ったところで目が覚めたのである。外はいい天気だった。窓からは、青空にマンガのような雲が浮かんでいるのが見える。窓をあけた。



挿絵　滝沢朋恵

■おだいのわたし（5）　ふたつの川

中村安伸

小台は荒川と隅田川に挟まれた土地である。日暮里舎人ライナー足立小台駅から東の千住桜木に接するあたりまでの間は、ふたつの川がほぼ平行に流れており、その間に天ノ橋立を思わせるような細長い土地が続いている。これはパリのシテ島や大阪の中ノ島のような自然の中州ではなく、人為的に作られた地形である。地図をみれば荒川が比較的直線的なのに対し、隅田川が蛇行していることがわかる。この蛇行のせいもあって氾濫を繰り返していた水流を、スムーズに東京湾へ運ぶために掘削されたのが、現在の荒川こと荒川放水路である。放水路の起点は小台より少し上流の岩淵水門にあり、下流へゆくにしたがって二つの流れは離れてゆくが、この近辺では川がふたつにわかれたばかりで距離が近いため、このような地形となっている。

たとえば足立小台駅のホームなどからふたつの川を見比べてみると、その役割や性格の違いがよくわかる。荒川は水量豊富で河川敷も広く堤防も大規模で、関東平野の水を束ねた雄大な感じがある。一方の隅田川は、小台近辺では整備が遅れているものの、デッキと呼ばれる川沿いの遊歩道を人が散策していたり、土砂や塵芥を積んだダルマ船がタグボートに引かれて通ったり、このあたりまで来るのは月に一度だが、水上バスが定期運行されていたりする。街に取り込まれ水運や観光などに役立てられている川という印象である。予備知識なくこの二つの川を見せられた人は、隅田川のほうが人工的で、荒川が自然のものと感じるかもしれない。たとえば徳田秋声の『あらくれ』における「小台の渡し」の描写などは、現在においてはむしろ（当時は存在しなかった）荒川（放水路）沿いの風景を彷彿とさせるものである。

少し前の報道で、この二つの河川の各地点にて泥土を採取し、含まれている放射性物質の量を計測し分析したものがあった。それによると、荒川では下流のほうに多くの放射性物質が検出されており、上流では少ない傾向であった。それに対して隅田川は下流域と上流域での差が小さかった。このことからも直線的で水量が多く水流の速い荒川、蛇行していて水量が少なく、水流のゆっくりしている隅田川という差異が読み取れる。荒川では泥土が押し流される速度も早いというわけである。

排水と水運という大河の役割を分離してふたつの川に分担させた東京の機能デザイン。その一端をまのあたりにすることができるのも、小台という土地の面白さのひとつだと思う。

■足立区小台とはとくに関わりのない二月の俳句

春寒や竹の中なるかぐや姫

竹やぶの数多の竹の中の一本の竹、その中にぼうっと光っているかぐや姫。竹取の翁に発見される前ということだろう。

春といえど立春は最も寒さの厳しい時期であり、その寒さを言う季語が「春寒」である。それでも節分、立春と暦が刻まれると、心のなかにぼんやりと暖かいものが点る感覚がある。この暖かさの感覚は日を追うごとに成長するが、それはかぐや姫の成長とも竹の成長ともイメージの上で同期しているだろう。

一年を四つの季節に分割することも恣意的な区切りに相違ないが、春を春と名づけたことによってかきたてられる前向きな気分がある。その気分をも借りて寒さを凌ごうと、古人はあえてこの時期を立春と定めたのかもしれない。

なお、「増殖する俳句歳時記」というサイトでこの句は二回とりあげられている。しかも紹介者も同じ清水哲男氏である。よほど気に入った句なのであろう。

※作者は日野草城（１９０１年７月１８日～１９５６年１月２９日）

■あっというまに一月が終わり、立春も過ぎました。あらくれ句会も良い感じに成長しています。皆様乗り遅れないように！（中村安伸）

■荒川喫茶瞥々 Vol.6　名曲珈琲　麦

今回は東京メトロ丸ノ内線の本郷三丁目駅すぐそばにある「麦」という店にお邪魔しました。ここはBRÜCKEのある小台橋から都バス一本で行ける場所です。

じつは「麦」はただの喫茶店ではありません、れっきとした「名曲」喫茶です。ご存知の方も多いでしょうが、名曲喫茶とは、クラシックを中心とした音楽を、結構な音量で愉しむことができるカフェ――喫茶店です。最盛期が戦後まもなくだったこともあり、その多くが古き良き時代を感じさせてくれるお店であるといえます。渋谷道玄坂にあるライオンなどは、その最たるものの一つでしょう。

「麦」も店内はクラシカルな雰囲気ですが、〈古ぼけた〉という言葉はあまり似合いません。壁も椅子もきちんとお手入れされ維持されているという印象を受けます。

地上の入口から階段を降りていくと、モーツァルトの肖像画がお出迎え。店内はキッチンとレジを挟んで二つのホールがあり、壁や戸棚には陶器や美術全集、クラシックのCDがずらりと並ぶ、居心地のいい空間でした。

パスタはちょっと軟かめでしたが、空腹の僕にも満足のいく盛り具合。ランチセットで食後にお願いした珈琲をゆっくり飲みつつ、名曲に耳を傾けることができました。

◆オーダー
ホットコーヒー１５０円（単品は３００円）
ボンゴレスパゲッティ７００円

◆店舗データ
名曲珈琲 麦
東京都文京区本郷２―３９―５

■波、返し縫い　主題

波は、陸と海の間にあるもの。その境界を幾度も、繰り返しなぞるもの。
陸と海という、この世界の大きな「端」と「端」が脈動しながらも、
つかずはなれず寄り添うことを思うとき。

波という「はざま」の揺らぎは、その架け「橋」である、
といえるのかもしれません。
そして、それはこの二つの端の結び目でもあります。
この企画では、出演者間での共演・共作、
または一方が作詩・曲した音楽や言葉を
一方の演奏者や歌手に託して、演目が進んでいきます。

演奏者たちの間で、そして来場者のみなさんとで
往き交うイメージ、その交感。
行きつ戻りつその糸（意図）を重ね、イメージを次第に濃くしながら
限られた時間の中を進んでいく。
そこ、ここから。
その間、淡いにあるものを、ぜひ見つけて、楽しんで下さい。

■ 2015 年 3 月 20 日（金）
小台　BRÜCKE
開場　18:30
開演　19:30
前売　2000 円
当日　2500 円
定員　25 名
予約　hello@cafebrucke.org
出演　biobiopatata
　　Gecko
　　斉藤友秋

■ 2015 年 3 月 21 日（土・祝）
八丁堀　七針
http://www.ftftftf.com/
開場　18:00
開演　19:00
前売　2000 円
当日　2500 円
定員　40 名
予約　yy@ftftftf.com
出演　le trio du yumbo
　　今井飛鳥
　　大野円雅

■協演
biobiopatata―作曲：斉藤友秋
Gecko―共作、歌：大野円雅
今井飛鳥―歌、朗読：大野円雅
大野円雅―共作、ギター：斉藤友秋

文責：大野円雅
絵：斉藤友秋

NIGHTMARE PICTURES

夏目漱石「小供の図」

明治の文豪夏目漱石の妻、鏡子の「漱石の思い出」という本の記述に
よれば、漱石はある時期に奇妙な絵ばかり描いていたといいます。そ
の作品の多くは漱石自身の意志によって破棄されました。この絵は捨
てられずに遺った当時のものと思われますが、この不穏な空気、病的
な憂鬱、やはり悪夢のような一枚の絵だと思います。

店主の手記

もう 1/12 年が終わってしまいました。1 月というのはなんとも短いものです。いろいろとやる気をだすのに、こんなに短かったら挫かれてしまいそうです。特にメールのやり取りが続くとすぐに忙殺されてしまいます。

去年と比べて店の何やらがないので時間があります。年末に続き、こないだボルダリングに行きました。ボルダリングって、考えるし、体の使い方を意識しないといけないからアレクサンダーテクニークみたいな感じなのかなとか思ったりします。それで第一月曜日はボルダリングと決めました。決まりました。

店のことはというと、1 月は新春初笑いと題しておだい寄席から始まりました。おなじみの早稲田大学の落語研究会に加えて、ボルボ亭イケ也さん（from スェーデン）をお呼びしての落語となりました。イケ也さんは今年に入ってからかなり多方面で活躍されているように見受けられます。またお呼びしたいです。その次にはコルネリさんの「シリーズ貝塚 東京」。工藤冬里さん、柴田聡子さんが演奏されました。「橋と音楽」は三輪二郎さんとニエリ・エビタさんのお二人。音楽は毎回どの方も素晴らしく思います。最後に「あらくれ句会」で締めくくりました。こちらも毎回日本語の勉強になります。

今の所、「橋と音楽」と「あらくれ句会」が月いちの企画となりました。ふと思い出したら是非いらしてください。

寄稿していただける方がこのところ増えていて嬉しいです。近所の方からの寄稿がありませんが、近所の方も是非どうぞ。プリンタの秘密を知ったのでページが増えてもあまり怖くなくなりました。

店主

■発行時点で決まっている店の予定

2/21（土）橋と音楽 vol.9 （アルフレッドビーチサンダル　滝沢朋恵 O.A. 斉藤友秋）
2/22（日）星の王子さまを読んでみましょう
2/28（土）第四回　あらくれ句会
3/7 （土）コーヒーの何か
3/14（土）文学と音楽、言葉とメロディー、エレクトロニカ・グリッチノイズ
3/20（金）波、返し縫い
3/21（土）橋と音楽 vol.10 （mmm　William Wilson）

詳細、最新情報は HP でご確認ください。
http://cafebrucke.org/event

小台マガジン vol.6
2015 年 2 月 21 日発行

編集・印刷 BRÜCKE